

自由な弟

これで一安心した。肩の荷が下りた気分だった。スッキリした気分の日比野俊介はハン

ドルを握っていた。助手席にはフィアンのかりやうりこが乗っている。二人ともとりあえずはやり切った感が否めなかった。自然と笑顔がこぼれてくる。

「ごめんね、変な弟で」

前を見ながら凛々子が言った。彼女は二十八歳で、俊介が務める会社の取引先の有望株だった。何度か彼女の会社に商談の打ち合わせで訪問しているうちに親しくなり、俊介が思い切って食事に誘ったのがきっかけだった。彼は彼女の生真面目で性格の明るいところが気に入っている。美人で料理も美味しくて、最高の彼女だった。自分にはもったいないと彼は思っていた。

交際は順調に進み、二週間前に俊介の方からプロポーズをして、晴れてゴールインとなったのだ。指輪を送った時に凛々子は涙を流して喜んでくれた。

そして彼は凛々子の実家に挨拶をしに行き、彼女の両親から結婚の承諾をもらったという運びだった。俊介はそれが一番の難関だと思っていた。彼女の両親が結婚を承諾してくれなければ何の意味も無くなってしまう。自分のことを気に入ってもらえるかどうか、俊介にはそれが一番のネックだった。

だが、その心配も取り越し苦労で、父親のウケもよく、母親にも気に入ってもらえた。場の雰囲気が盛り上がるにつれて、彼は固さも取れて、緊張もほぐれてきたのだ。自然と笑顔が出てきて、両親との会話も弾んだ。

そしてその途中でもう一人、あとから登場したのが凛々子の弟だったのだが、紹介してもらった。

この子がちょっと変わり種で、なんとニューハーフだったのだ。両親もすっかり呆れていたが、本人はいたって普通に明るく振舞っていた。

真しんという二十四才の子だが、髪が長くて艶々しており、男としては背も低めで、一六五センチほどだった。笑顔の可愛い子で、この子が男だなんてとても信じられなかった。俊介は一目見たとき、普通に妹だと思ったのだ。でも話してみたら声は男っぽい。男と女の間ぐらいの声質だ。凛々子から弟だと聞かされるまでは、女の子だと信じて疑わなかった。

それがニューハーフだと聞いてびっくり仰天だ。しかもちゃんと胸も豊胸しているようで、しっかりとした膨らみがあった。女の子だとしても、とびきり可愛い部類に入る子なのだ。

その子が座敷に入ってきて、俊介は変に緊張してしまった。豊胸手術の方は、面と向かって訊いたわけではないが、立派な谷間があったので、恐らくそうだろうと思っただけだ。

姉の凜々子と性格は違うようだが、凜々子にも引けを取らないくらいの美人だった。女性よりも女性らしい子で、この子は女の子になって正解だろうと思った。

「あっはっは、大丈夫だよ。かなり個性的な子だけど、楽しい子じゃないか」

「ありがとう。あの子ね、中学生のころから、そういうことに目覚めたんだけど、そうじゃないかって疑問を持ったのは私だったの。母もそう思ってたみたいで、家族会議して本人に確かめてみたら、やっぱりそうだったみたいで、その場でカミングアウトしてくれたってわけ」

「へえ、そうだったんだ。でも理解のある両親でよかったね」

「そうなのよ。本当はあの子、あなたには『弟はいないことにしてほしい』って言ってたのよ。自分がいたら姉ちゃんの結婚が破談になるからって言って、それを心配してたの。私は、そんな人じゃないから大丈夫よって言って、今日は出てきてもらったんだけど」

「ぜんぜん大丈夫だよ。俺はそんなこと気にしないから。むしろこれから親戚付き合いができて楽しみだと思ってるんだから」

「ありがとう。そう言ってもらえてホッとしたわ」

凜々子は安心したように笑みを浮かべたが、真が心配していたことは、凜々子も少しは気にしていたかもしれない。性同一性障害の弟を俊介が受け入れるかどうかは、実際に会ってみないと分からないのだ。いくら真のクオリティが高くても、そういう問題ではないのだ。真のことを受けれてくれたことで、凜々子としても心は軽くなっていた。

家族の中にそういう子がいることで、凜々子たちも気を遣ったことだろう。真のことを傷つけてはいけないし、人に傷つけられることもあるだろう。そういうときのフォローも大事なことなのだ。

真の前では言葉を選びながら会話をするというのも、結構神経を使いそうだ。俊介にそれができるかどうか、ちょっと自信がなかったが、女の子のように接してやれば大丈夫だろう。

彼はそれよりも真の美しさに強いインパクトを受けた。俊介もニューハーフについてはあまり詳しくないのだが、今日初めてそういう人に会って、これがニューハーフなのかと、少し感動してしまった。

今まで見たことがなかったのだが、実際に会ってみると、本当に女みたいで、どこで見分けたらいいのか分からないぐらいだった。こんな子が会社の中にも、絶対に判らないだろう。女子トイレに入っても、まず気づかれることはないと思った。むしろ女性の中には、真よりも男っぽい人がたくさんいる。

男だと聞いたので余計にそう思ったのかもしれないが、とにかく目を引く子だった。そんな彼女？ を交えて、初めての両親との顔合わせは和やかな雰囲気で行われた。今日、凜々子の家に挨拶に行って、良かったと思った。